

Rochester 留学記2013 (帰朝報告)

徳島大学 浜田大輔

2011年10月から2年間米国に留学させていただきこのたび9月末に帰国しました。今回は留学後半の経過、僕が感じた留学の意味とこれから留学を志す若い先生へのメッセージを少しだけ綴りたいと思います。

私の留学先である University of Rochester Medical Center は日本での知名度こそ高くはありませんが2012年の NIH からの獲得予算は Washington University, John Hopkins, Duke University と言った big name を抜いて整形外科分野で現在全米一位、言い換えればその成果が今アメリカで最も期待されている施設です。仕事の内容はまたしかるべき場所で報告させていただきますがたくさんの優秀な研究者の中で仕事が出来たことはかけがえのない財産となりました。留学の目的の一つであった基礎研究を通して OA の理解を深めるという点では一定の成果が上げられたと思っています。この成果を日本での診療に生かすことがこれからの課題です。

昨年の同門会誌で報告させていただいた留学1年目と比べると少しアメリカにも慣れたため日常生活で不自由することは少なくなりました。とはいっても英語がペラペラになったわけではなく最低限の英語が話せればどうにでもなることに気付いただけです……。1年程向こうで暮らすと耳が慣れてある程度聞き取ることは出来るようになり、英語に対する反応が早くなりますが話す力はよほど意識しないとなかなか上達しません。英会話だけであればインターネットが発達した現代なら日本にいながら学ぶことが十分可能ですし、あえて留学する必要はありません。では留学の意味は何かという僕は

(特に医師の留学は) 英語を学ぶことよりも英語で学ぶことが出来る点だと思っています。留学後半はこの点を強く意識しきれいな英語はあきらめて英語で吸収し伝えることを重視しました。というわけでペラペラにはなりませんでしたがそれなりの収穫があったと思っています。

現時点での研究成果は2012年 Minneapolis で開催された ASBMR の poster 発表, 2013年の San Antonio で開催された ORS で oral 発表, 2年の結果をまとめて専門誌に投稿した最初の論文 (こちらはもう少し時間がかかるかもしれません), ボスに来た依頼原稿を手伝った基礎研究の book chapter といったところです。また帰国直前に開催された学内学会では72題の演題の中から6題の口演に選ばれ、学会後の晚餐会で優秀演題として表彰してもらいました。おまけですが日本にいるときに書きそびれていた case report も片付けました。決して十分な成果ではないかもしれませんがなによりもあのまま日本にいては決して得られなかったものが得られたことが収穫だと思っています。2年間臨床から離れ後れを取った分はこれから急ピッチで取り戻したいと思います。

ますます世界との競争にさらされるこのご時世、現在医学の分野に限らず日本から海外へ留学する人間は減少の一途をたどっているようです。理由は日本にいた方が遙かに楽だから、英語が話せないから等いろいろあるようです。留学は苦勞も多いですがそれを補ってあまりある経験をする事が出来るはずで。若い先生には早い時期に海外留学を経験していただきたいですし今後はそのためのお手伝いをしていきたいと思っています。

最後になりましたがこの人員不足の中留学の機会をいただいたことを安井前教授はじめ教室や同門の先生方に感謝しております。また幸運にも西良教授が赴任され教室が新たなスタートを切る時期に帰国でき今後は新しい教室の発展

に少しでも力になればと思います。昨年末同門会からいただいた奨学金は統計ソフト、画像編集ソフト、データベース等の購入費に充てさせていただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

